

由来としての信仰

——初期ハイデッガーにおける宗教的背景に関する一考察

上原 潔

一 問題設定

本稿の目的は、最初期のマルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の宗教的背景およびその内容を検討することにある。

周知の通り、前期ハイデッガー思想は——とりわけ第一の著である『存在と時間』(一九二七年)においては——、極めて宗教的色彩を脱色した方法を採用し、聖なる次元について言及を避け、宗教的な事柄を意識的に除外している。ところが、フーゴ・オットの『マルティン・ハイデッガー』やヴィクトル・フアリアスの『ハイデッガーとナチズム』などの詳細な文献学的研究によって、ハイデッガーが学的成長過程の最初期に、カトリック神学、それも反近代的な超保守的カトリックの教義学に賛同を示しており、ハイデッガー自身もまた、自らの強い意志で司祭や神学者の道を歩もうとしていたことが明らかとなってきた。結局は、この神学という道はハイデッガーの持病により途絶されることになるのであるが、それはいわば外的要因によ

るところが大きいと言える。そこから仮定できるのは、その後のハイデッガー哲学も、こうした「信仰という由来」に、生涯をかけて対決しなければならず、実際にそのような動機を背景としてつづつ哲学を営んできたと仮定することができることである。そのことはハイデッガー自身の次の言葉からも推測可能である。すなわち、「このような神学という由来がもしもなければ、私は思索の道に入ることは決してなかったでしょう。思うに、由来 (Herkunft) は将来 (Zukunft) でもありつづけるのですね」(GA12, 91)。

ところで、フアリアスによると、「一人の哲学者の思索の発生史において、彼が生まれ育った境遇は重要な役割を果たしている。この一般的原理は、とりわけ、マルティン・ハイデッガーの場合には妥当する。というのも、そこでは、生まれた場所への、彼の故郷への結びつきが、その思索の中心的トポスを形成し、その哲学上の仕事の全体を規定しているからである」。したがって、さしあたって本稿では、幼少期から青年期に至るまでのハイデッガーに影響を与えたと思われる当時のカトリック神学界の状況を概観し、ハイデッガー哲学の宗教的背景を浮き彫りにする。次いで、一九一〇年を中心として、ハイデッガーが保守的カトリックの発刊した雑誌「一般展望」や「アカデミカー」に寄稿した諸論文の分析を行う。このことによって、最初期のハイデッガーが反近代的、保守的なカトリックの潮流に与していたことが明らかになるだろう。

二 故郷メスキルヒ——近代対反近代の源流

マルティン・ハイデッガーは一八八九年九月二十六日に、ドイツの西南部に位置する当時のバーデン州、現在のバーデン＝ヴュルテンベルク州のメスキルヒ (Meskirch) に生まれた。メスキルヒは、十九世紀末には人口二千人、現在でも九千人弱の小さな町である。メスキルヒという町の名前は、フアリアスによれば、この地に教会を建設した「マッソ Masso」という人物の名前と「教会 Kirche」をつなげたものである。あるいは、文字通りミサを行う教会という意味から由来しているという説もある。いずれにせよ、その起りからして、教会を中心として建設された宗教的な町であると言えるだろう。一般的に、ドイツの南部ではプロテスタントよりもカトリックが人口比として優勢を占めるが、バーデン＝ヴュルテンベルクに関しては、両者の勢力はほぼ同等である。もともと、メスキルヒでもつばらカトリック教徒が居住していた。それ故に、何らかの宗教上の対立が起こるとしたら、それはカトリックとプロテスタントの間ではなく、カトリック内部の争いとして浮上することになる。そして、ハイデッガーが誕生した当時、まさにそうしたカトリック内部の対立が鮮明な形をとって起こっていたのである。

ハイデッガーの思想形成に少なからず影響を与えたと思われるこの対立を理解するためには、その前提となる事件に若干ふ

れておかなければならない。それは、いわゆる「文化闘争」と呼ばれる事件である。文化闘争とは一八七一年から一八八七年まで続いたビスマルク宰相時代における最大の国内紛争であり、中央党を筆頭としたカトリック勢力に対して、自由主義勢力と連帯したビスマルクおよび文相フアルクの対立であった。この対立の要因となっていたのは次の二つである。一点目は、いわゆる政教分離の問題である。近代国家は政治的、社会的領域において宗教からの分離を遂行せざるをえないことがある。

それは、信教や信条の相違にかかわらず、法の前での平等を掲げる自由主義的な近代国家の原則的要請であった。このことは、教育や婚姻などにおけるカトリック教会の緊縛と衝突する。二点目は、カトリック信徒のアイデンティティーに関する問題である。つまり、カトリック信徒のアイデンティティーはアルプスの彼方のヴァチカンにあり——いわゆるウルトラモンタニズム (Ultramontanism) ——、それに加えてカトリック教徒の国際連帯、いわゆる黒色インターナショナルの活動の影響もあって、これらは成立まもないドイツ帝国の国家的統一性を揺るがすものとして危険視されたのであった。

これら二点の問題を背景として、保守的伝統的カトリック教会と自由主義的近代的ドイツ帝国の間の文化闘争が繰り広げられることになるのであるが、具体的な闘争の発端の引き金のひとつとなったのが、「教皇の不可謬性」に関する教理である。一八七〇年夏、ヴァチカン公会議が開催され、教皇不可謬性の教

理が可決され、同時に教会は自由主義の政治的、文化的、経済的原則を拒否すると公言された。一方で、ピスマルクは「イエズス会取締法」を制定し、また「五月法」と呼ばれる一連の法律によつて、教会や宗教的教育機関に対する統制を強化し、ヴァチカン陣営の影響力を抑え込もうと試みたのであつた。

こうしたドイツ帝国とローマ・カトリック教会との間の文化闘争は、両者が歩み寄る形で、一八八〇年代には一応の終息を迎えることになるが、今度は、カトリックの内部での文化闘争、いわゆる伝統主義と近代主義の間の文化闘争を引き起こすこととなつた。先に述べた、教皇の不可謬性の教理の発布を発端として、「古カトリック教会 altkatholische Kirche」と呼ばれる新たな教会組織が生まれたのである。「古カトリック」と称するものの、その組織は自由主義的、啓蒙主義的性格を持つており、教会全体の近代化を目指して、独身制の廃止、聖者崇拜の制限、教区の自治、司祭の選択を求めて努力してゐた。この運動はバーデン州を中心に活性化し、経済的に恵まれた自由主義的なカトリックの教養市民層を基盤としていた。古カトリック派は伝統主義的な教徒に比べ数は劣つていたものの、カトリックとの軋轢に悩んでいた帝国政府や各州からも支援を受けたため、急速にその範囲を広げていった。

メスキルヒは、この運動の一大拠点となつており、住民の半数近くが古カトリック派に帰属する時期もあつたという。ハイデッカーが生まれたのは、まさに伝統主義的なヴァチカン派と

古カトリック派が町を二分して争つていた時代なのである。ハイデッカーの父親が属してゐたのは、保守的伝統的なヴァチカン陣営であつた。一八九〇年代に入ると、古カトリック派の勢力は衰えを見せ始め、それまで古カトリック派が占有してゐたメスキルヒの聖マルティン教会もヴァチカン派に返還されることになる。堂守りを務めていたハイデッカーの家も、この時にハイデッカー一家に返されることになる。マルティンの弟であるフリッツの証言によれば、このとき、古カトリック派の堂守りは、ハイデッカーの父親に直接に鍵を手渡すのを嫌つてか、偶然家の前で遊んでいたマルティンに鍵を渡したという。「こうした紛争の中で、幼少のマルティンは初めて伝統と近代との対立を体験した。彼はそのような近代の持つ他を侮辱し傷つける側面を経験したのであつた」。裕福で近代のかつりべらのな社会層に対して、貧しいながらも伝統を保守する自身の集団が勝利を取めたこの幼い日の体験が、ハイデッカーにとって忘れ難いものであつたことは想像に難くない。

三 コンスタントツ——コンラート学寮における本来性と非本来性の経験

ところで、リュディガー・ザフランスキーの報告によれば、「ハイデッカー家は豊かではなかつたが、貧しくもなかつた。一九〇三年の時点で土地資産が二千マルク、所得税見積もりが九百

六十マルクだったので、中流階級ということになる。家族が生活していくのに困ることはなかったが、自費で子どもを学費の高い上級学校へ進ませることはできなかった。そのとき教会が援助の手を差し伸べてきた。それは教会の英才助成と同時に、何よりも地方の司祭後継者の養成のためによくなされていたことであった。こうしたカトリックの庇護のもとに、一九〇三年、ハイデッガーは、メスキルヒでの学校生活を終え、コンスタンツの人文主義のギムナジウム、ハインリッヒ・スゾ校の第四学年に編入し、ザンクト・コンラート学寮に入ることになる。

コンスタンツは、閉鎖的なカトリック世界であったメスキルヒに比べると、極めて近代的な町であった。ザフランスキーによると、コンスタンツでは、「ニーチェ、イプセン、無神論について、ハルトマンの『無意識の哲学』、ファイヒンガーの『かのやうにの哲学』について、心理分析や夢判断についてさえ話題になつていた。コンスタンツではまさに進歩的精神の風が吹いていて、……この町はバーデンのリベラリズムの牙城の地位を確保し続けていた」。こうしたコンスタンツの町の自由主義的、近代的風潮に対抗して、コンラート学寮の神学生は、護教論を習得させられ、世俗的なものとの争いへの備えをさせられていたという。この学寮は、文化闘争と古カトリック派との争いの時期には、教会政策上の観点から、この地域のカトリックの防波堤の役割を果たしており、ハイデッガーがそこに入寮していた時期も、プロテスタントとリベラリズムの増大する影響を阻

止するという重要な役割を演じていたのである。このように、近代精神を積極的に取り入れ、自由な青春時代を謳歌する学生たちがいる一方で、ハイデッガーのように伝統的な教理の修学や宗教問答の訓練に励む——教会の奨学金を得て地方からやって来た比較的裕福でない——カトリックの寮生たちがおり、そこにはかつての古カトリック派との争いと輻輳する構図があったと言える。ザフランスキーの推測によれば、そうした環境の中で、『存在と時間』をはじめとする後の著作の中で頻繁に語られることになる、「本来性[Eigentlichkeit]と」「非本来性[Uneigentlichkeit]との対立図式が、この時期に形成されたのであった。彼は次のように述べる。

神学寮と外の陽気な町の生活との間の、つまりカトリック世界と市民的でリベラルな環境との間の緊張関係の中に、マルティン・ハイデッガーはすでに生徒時代からこの二つの世界についての観念を作り上げていたと言えよう。こちらには厳しく、重々しく、粘り強く、ゆっくりと進む世界、あちらにはめまぐるしく変化し、表面的で束の間の刺激に生きる世界。こちらには苦しい努力、あちらには忙しいだけの活気、こちらではしつかりと根が下ろされているが、あちらでは根なし草、一方は悪戦苦闘、他方は一番安易な道を求める。一方は思慮深く、他方は軽はずみ、一方はいつまでも自己に忠実で、他方は気晴らしばかりで自己を見失っている。こうした図式は後にハイデッガー哲学におけ

る本来性[、]と非本来性[、]という概念として立身出世することになるのである。

その後、ハイデッガーはより多額の奨学金——エリナー奨学金——を得て、フライブルクのベルトルト・ギムナジウムに転校し、コンラート学寮を後にする。一九〇七年に彼は、アビトゥーアに合格して、大学入学資格を得る。この出来事は、当時のメスキルヒの地方紙で、保守的カトリック政党である中央党の地方支部の機関紙「ホイベルク民報」に掲載されることになった。つまり、故郷メスキルヒの保守的なこの機関紙の読者層の中では、ハイデッガーは神学研究者あるいは聖職者としてのその将来を囑望されていたのである。実際に、ハイデッガーはアビトゥーアを終えた後に、いったんオーストリアのフェルトキルヒの町に近いティジスという村にある修道院に入ることになる。しかし、彼はわずか二週間ほどでこの修道院を出てしまう。その理由は、喘息性の神経性心臓疾患によるらしい。修道院での極めて厳しい生活には不適格だと判断されたのである。もともと、ここでハイデッガーは神学の道をあきらめたわけではなかった。直ちに、フライブルク大学神学部に入學手続きをし、ポロメオ学院という修道院にも似た厳格な規律に縛られた神学寮へと入寮している。

四 近代主義論争とアブラハム・ア・サンクタ・クララ論

このような経過を経て、一九〇九年冬学期から、ハイデッガーはフライブルク大学神学部で神学の研究を始める。ところで、この時期にカトリック教会の内部で問題となっていたのは、いわゆる「近代主義 Modernismus」を巡る論争であった。教皇の不可謬性を発端に、比較的独立した形で組織された古カトリック派の場合よりも、この論争はより一層カトリック内部の統一性を揺るがすものであり、それ故に、統制をはかるのにも手間のかかる問題であった。そこでは、近代主義と統合主義 (Einheitsismus) が教義上あるいは文学上で、激しくしのぎを削っていた。前者の近代主義とは、教義を歴史的制約のもとに観察し、啓示や信仰も個人的宗教体験から説明し、したがって、教皇の不可謬性をはじめとする教義を近代的理性の基準に適合させるカトリック内部での革新運動である。後者は、カトリック信徒の宗教上のあるいは世俗上の生活を、総じて教会の原則にしたがわせようとする陣営で、ヴァチカンの強硬路線を支持していた。一九〇七年には、ピウス十世が回勅「パッシェンディ・ドミニチ・グレジス——近代主義の教説について」を發布し、近代主義を厳しく断罪し、一九一〇年には聖職者および神学部教職員に、自分が近代主義者ではないと宣言するいわゆる「反近代主義者宣誓」を義務付けた。

こうした論争の中で、反近代的、統合主義陣営において、一種、象徴的存在となっていたのが、アブラハム・ア・サンクタ・クララである。アウグスチノ修道会士の彼は、ドイツのパロック時代の最も有名なカトリックの説教師で、当時の偉大な文筆家の一人であった。卓越した風刺で当時の支配的な風習を鋭く批判したアブラハムは、オーストリア宮廷の半ば公式の説教師でもあって、当時の、とくにウィーンの政治生活、宗教生活に異常なまでの影響力をあたえており、彼の著作は何度も版を重ね、帝国の首都だけではなく広く影響を及ぼしていた。彼の名声は特に南ドイツで現在に至るまで残っている。そうした状況下で、「ホイベルク民報」の報じるところによると、一九〇九年九月六日にメスキルヒ近郊の村ハウゼン・イム・タールで、アブラハムを讃える記念式典が開催されたという。そして、その式典の実行委員長を務めたのがハイデッガーだったのである。その様子を、新聞記事は次のように報じている。

一同は、我々の偉大なる同郷人アブラハム・ア・サンクタ・クララを讃え、その業績を再び記憶に呼び戻し、そうすることによってわれわれの毎日の仕事のための新たな感奮と新たな諸理念を見つけ出さんと、ただこれ一つを願って集ったのであった。……祝典実行委員を極めて手際よく巧みに切り回したのは、神学部へ進むことになつてゐるメスキルヒのマルティン・ハイデッガー氏であった。詩情豊かな言葉でもって彼は祝典の開会を宣した。

「ホイベルク民報」は、続けてハイデッガーの挨拶を取り上げ、彼がそこでドイツのカトリック教会の間で生じているある論争について演説したことを伝えている。ハイデッガーがそこで言及したのは、リヒャルト・フォン・クララリクに率いられた超保守的、統合主義的な雑誌「グラール」と、カール・ムートを中心とする近代主義の信奉者が編纂する「ホーホラント」との間の文学論争であった。この論争は近代主義論争の中から派生した一つの争いであったので、当時の教皇ピウス十世は明らかに「グラール」を支持していた。ハイデッガーはこの論争に関して、「的確な言葉で表現し、……両誌の側の光と影の部分を描き出す極めて客観的な演説」を行つたとされている。しかし、ハイデッガーは演説の終わりに、「参加者たち、特にギムナジウムの生徒たちに、「グラール」の予約購読者になり、その支持者 (Supporter) になるように要請した」という。そして、「演説が終わると嵐のような拍手を受けた」のであった。「グラールの支持者」という新聞記事の表現は、おそらく「グラール同盟 (Grauerbund)」を意味するものと思われる。クラリクの支持者たちは、「グラール同盟」と自称する「戦闘的な組織」を形成しており、若きハイデッガーはこれに加盟してただけでなく、重要な役割を少なからず引き受けていたそうである。こうした事態からは、当時、ハイデッガーが近代主義論争に積極的にかかわり、統合主義陣営に与っていたことが判明するのである。

こうしたハイデッガーの保守的な立場は、ハウゼンでの記念

式典の約一年後に開催された、アブラハム・ア・サンクタ・クララの銅像の除幕式に関する論述からも窺い知ることができ。その論述は、ミュンヘンの出版社アルミン・カウゼンの「超保守的なカトリック統合派の雑誌」である「一般展望」に掲載されたものである。そこでは、昨今の近代主義的な文化の軽薄さが、アブラハムの風貌や思想の重厚さと対比されて描かれている。ハイデッガーは、現代の近代主義的風潮について次のように断言する (GA13, 3)。

外的文化の我々の時代、目まぐるしいテンポの我々の時代は、それだけに一層後方を見やりつつ、前方に視線を向けなければならぬ！ 地盤を崩壊させる革新の暴威、生と芸術の深遠な精神的内容を飛び越えての常軌を逸した飛翔、絶え間なく色褪せ行く刹那的刺激へと方向づけられた現代の生活感覚、今日のあらゆる種類の芸術を動かし、ときに我々を窒息させるような蒸し暑さ——そういつたことが或るデカダンスを指し示す諸契機、健康からのまた生の彼岸の価値からのある悲惨な転落を指し示す諸契機に他ならない。

そうした現代の文化に対して、アブラハムの「生活綱領」は「十字架につけられた者イエスへの愛」であり、そこでは「源カトリック的な力 (irkatholische Kraft)」、信仰の誠実、神の愛が発露されているところ (GA13, 2)。それ故に、ハイデッガーは次のように願う (GA13, 3)。

アブラハム・ア・サンクタ・クララのようなタイプの人物が、静かに民族の魂 (Volkseele) のうちで生き続けながら、いつまでも我々を支えていなければならぬ。彼の多くの著作がなお一層多く流通することができる貨幣となりますように。彼の精神が、……健康維持にあたっての或る力強い酵素に、そして苦痛が悲鳴を上げる場合は民族の魂の新たな治療にあたっての或る力強い酵素となりますように。

ここでのハイデッガーの文化批判は、「伝統の価値／自由主義的かつ世俗的な現代的価値」という枠組みを超えて、「健康／病氣」という範疇にまで高められている。フアリアスによれば、ハイデッガーはこのようにアブラハムを解釈することで、「傾向的な攻撃性を持つ「精神的な」反撃に打って出るように促し、アブラハム・ア・サンクタ・クララの姿を行動と反動との範例と看做しているのである」。

さらに注目すべきは、この論述の中でハイデッガーが、除幕式が簡素な田舎で行われたことを評価し、またアブラハムの風貌を自然や大地の隠喩を用いて表現していることである。明白に語られてはいないが、そこからは田舎での質素な生活と都市文明が対照的に描き出されていることが容易に窺い知れる。つまりそこでは、「本来性／非本来性」あるいは「根源的／通俗的」という図式は、「朴訥な田舎の生活／軽薄な都市文明」という図式と輻輳しているのである。科学技術の時代を嘆き、都市文明

の席巻によって故郷の喪失が生じていると痛烈に現代文化を批判する一方で、ドイツ民族がその大地に根付くことを切望し、「哲学の仕事のいるべき場所は、農夫の仕事のただなかにある」(GA13, 10)と断言する、後年のハイデッガーの思想は、すでにこの時期に確立されていたと言えるだろう。

五 「アカデミカー」への寄稿論文

ところで、フライブルク大学入学後のハイデッガーは、複数の雑誌に論文を寄稿し始めるようになる。その中でも、雑誌「アカデミカー——カトリック学生同盟月刊機関誌」には、一九一二年まで小部の書評を合わせ合計八本の文章を掲載している。

この雑誌は先に見た「一般展望」と姉妹関係にあり、一九〇八年十一月に創刊された機関誌で、カトリックの諸団体をつなぐ役割を担っていた。その綱領によると、「学生生活のあらゆる分野に我々の高貴なキリスト教的理想を伝える使者」という位置付けを与えられている。「その雑誌はいづれにしても、ドイツ近代主義をめぐってカトリック内部で大きな対立があったあの時期に、教皇ピウス十世の路線に全面的に沿ったかたちで、教会の権威をまさしく学問的哲学と精神科学一般においても断固として護る、という姿勢を保っていたのである」。

露骨に教会政治的なこうした雑誌に投稿していたことをハイデッガー自身が気にしたのだろうか、これらの論文は、当初、

全集のリストには加えられておらず、フーゴ・オットが発見するまでは、ハイデッガー研究者でも知ることのなかったものである。その中でも、ハイデッガーの処女論文と目される書評論文「死を通して生へ *per mortem ad vitam* (ヨルゲンセンの『生の虚偽と生の真理』に関する随想) (一九一〇年三月号) は、当時のハイデッガーの宗教思想を明らかにする重要な文書である。

ヨハネス・ヨルゲンセンは、デンマークの作家で抒情詩人にして随筆家であるが、一八六九年にカトリックに改宗し、一九一三年にはルーヴァン・カトリック大学の美学教授となった人物である。ハイデッガーがここで取り上げた彼の著作『生の虚偽と生の真理』には、無神論者かつ自然主義者でダーウィニズムを信奉していたヨルゲンセンが、神の啓示を受けて劇的にカトリックへと改宗した過程が描かれている。そのようなヨルゲンセンを、ハイデッガーは「現代のアウグスティヌス」(GA16, 2)と形容し高く評価するのである。

ハイデッガーがヨルゲンセンの回心を評価する際、まずもって、当時台頭していた「個性 *Personlichkeit*」崇拜からの脱却に重心が置かれる。「今日の我々の時代では、「個性」について頻繁に語られる。そして、哲学者たちは新たな価値概念を見出す。とりわけ文学においては、批判的、道德的、美学的な諸概念と並んで、「個性の価値付け」が使用されている」(GA16, 3)。しかし、ハイデッガーはそうした個性崇拜に対して厳しい批判を

加える。というのも、ハイデッガーの見解によれば、「真理」は個性に基礎づけられるものではないからであり、かえって個性は真理を虚偽へと倒錯させる可能性もあるからである。そうした関連で、ハイデッガーは次のように述べる (GA16, 5)。

幸福になりうるのはただ生の虚偽によつてだけである。イプセンはこの命題を本当に保ち続けるだろうか。否である。この命題は生物学的根本原則に反しているからである。当然のごとく、幸福になるのは真理であり、虚偽は没落に至らなければならぬ。これが実り豊かな大前提である。真理から外れて行くならば、真理は汝の逸脱を罰するであろう。しかし、真理をより厳しく探し求めたものもいて、あらゆる偏見を投げ捨て、あらゆる軛を打ち破つたもの、「自我の精神的、倫理的優位」を信じて自己の信念を打ち立てた者もいたのではなかつたか。我々が今見てきたような偉大な「個人的なものたち Persönlichkeiten」は幸福を見出したのだろうか。否である。見出したのは絶望と死である。一連の証人を見よ。彼らは、脇道に逸れていつてピストルを額に当てたではないか。つまり彼らはみな、真理を持つていなかつたのである。つまり個人主義 (Individualismus) は、間違つた生の規範なのである。それ故に、肉体の意志を遠ざけよ、世俗の教説、異教の教えを遠ざけよ。

引用文の最後でハイデッガーは、個性崇拜と個人主義とを並置している。ところで、この個人主義は、教皇ピウス十世が「パツ

シェンデイ・ドミニチ・グレジス』の中で、近代主義者の誤謬として批判した「宗教的内在 religious immanence」⁽²⁾と並行関係にある。宗教的内在とは、端的に言つて、宗教を人間に内在する「感覚」に由来するものと看做す見解であるが、ピウス十世が懸念したのは、そのように宗教を個人的体験に還元することで、教義体系が相対的なものと看做され、また神的存在の自存性が動揺させられることであつた。当時のハイデッガーにとつても、真理を個性や個人的体験に求める個性崇拜や個人主義は、あまりにも主観的なものであり、むしろ人間が真理を受け取るのは超自然的啓示によると考えられている。そのことを、ハイデッガーは「生物学的前提」(epd)と看做し、次のように主張する (epd 括弧内は引用者)。

より高次の生は、低次の形態が没落することによつて引き起こされる。植物は生長するためには非有機物を必要とする。動物は植物の死によつてのみ生きることができ、こうして「生命の」連鎖が高みへと上昇していく。それ故に、汝が精神的に生き、汝の幸福を得たいとするならば、死すべきである。汝の中で下位に当たるものを殺さねばならず、超自然的な恩寵と共に働かねばならない。そのときにのみ汝は復活するであらう。

このような超自然的な恩寵を通しての真理の発見という発想から、荒々しい自然を美と看做す「自然主義」が批判される。自然主義は、「ニーチェのような人物の純粹きわまるチェーザ

レ・ボルジア流の熱狂主義である。彼らは嫌悪の念と罪を偶像化して、これに香煙を振りかけて褒めそやしている」(G16, 4)と判断される。それと同時に、ハイデッガーにとって、ヨルゲンセンの回心は「自由主義思想の潮流」(G16, 3)からの離別をも意味していた。ハイデッガーは、「自由思想家(Freidenker)は信仰しようと思せず、真理を踏みつけようと欲している。彼らが欲しているのは、自身の移り気と情熱である」(G16, 5)と述べる。それとは対称的に、自由思想との離別の末にヨルゲンセンが発見したのは、「偉大な、確固たる過去との結びつき」であった。つまり、真理は個性や自由ではなく、超個人的な伝統や権威の力の中に求められるべきなのである。

ハイデッガーのこうした見解がより顕著に現れているのが、同じく「アカデミカー」に掲載された「F・W・フェルスター『権威と自由——教会の文化問題についての考察』の書評」(一九一〇年五月号)である。ハイデッガーが取り上げたフェルスターの著作『権威と自由』は、当時の近代主義論争を巡るカトリック関連の著作の中でも重要な役割を果たしており、「それは教会的な権威哲学(Autoritäts-Philosophie)を倫理的—宗教的個人主義の哲学から擁護するものであった」という。書評の中で、ハイデッガーはフェルスターの主張に全面的に賛同の意を表明しており、次のように断言する。すなわち、「大抵の人間が、自立しつつも、真理を見出そうと思せず、闊い取ろうと思せず、むしろ真理を十字架にかけているというこのほとんど覆しえな

い事実からしてすでに、個人主義的な倫理の可能性からは、あらゆる基盤が奪い去られている」(G16, 7)。続けてハイデッガーは、真理が求められるべきところの超個人的な伝統や権威が、外的な形、つまり教会という制度を採っていることが必要不可欠だと指摘しつつ、「近代主義を次のように批判する(crit.)」。

さらには、生の主要な諸真理は、学問的にアプリオリには構成されえない。むしろ、豊かで深遠な生の経験、さらには衝動的の世界に対する独自の精神的な自由が要請されなければならない。それ故に、広く称揚されている個性礼賛(Personlichkeitskultus)は、それが宗教的—倫理的権威のもっとも深遠な源泉と密接に結びついているときにのみ、繁栄するのである。この宗教的—倫理的権威は、当然のことに、尊敬に値する外的な形式を必要不可欠とする。そして教会が、その永遠の真理という宝を守ろうとして、近代主義の破壊的影響を防ぐために立ち向かうのは、当然のことである。近代主義は、その近代的な人生観がキリスト教の伝統の古くからの知恵にこの上なく鋭く対立していることを意識していない。

ここから、ハイデッガーは近代主義論争において、極めて保守的な姿勢を採っていたことがはっきりと窺い知れるだろう。そして、ハイデッガーはこの書評の末尾で、次のように述べる。すなわち、「本書を読むと『いつそう深く掘れ、そうすればカトリックの地盤に突き当たる』というあの偉大なゲレスの言葉を

思い出す。フェルスターは、深く掘つてゆくという大胆な、いかなる結果をも恐れない勇氣をもつて『そのよある』(GATG, 8)。この言葉から判明するのは、いかに最初期のハイデッガーが、カトリック信仰に重きを置いており、またカトリック信仰という地盤に確固として立脚しながら思索を営んでいたかということである。そして、そのカトリック信仰の内容は、目まぐるしく転変する現代文化に対抗して、朴訥かつ重厚な思索の歩みを求めるものであり、伝統や權威といった超個人的な基盤とのつながりを重視するものであったのである。

六 結語

以上で、最初期のハイデッガーの宗教的背景およびその内容を概観してきた。彼は出生当時より、カトリックの近代化を巡る問題に巻き込まれてきたのであり、その都度の論争においては、常に保守思想の潮流に与してきたのである。ただし、こうしたカトリックの庇護のもとでの研究生活、そして周囲からも期待されていた神学者としての将来は、その後ただちに途絶することとなる。一九一〇／一一年の冬学期に、またしても喘息性の神経性心臓障害が再発し、二カ月半にわたつて勉学を中断せざるをえなくなったのである。当時のカトリック神学研究はカトリック司祭という将来の職業と不可分に結びついていたために、司祭として職務をこなしてゆくには健康上問題のあるハ

イデッガーは、間もなく神学研究を全面的に放棄せざるをえなくなる。

こうした状況の中で、ハイデッガーのカトリック信仰に対する姿勢も徐々に変化し始める。この問題については稿を改めて論じなければならぬが、最終的に一九一九年にハイデッガーは友人で神学者のエンゲルベルト・クレープス宛ての書簡の中で「カトリシズムのシステム」と決別を表明することになる。

「歴史的認識の理論にまで及ぶ認識論的洞察によつて、私には、カトリシズムのシステムが問題をはらんでおり、もはや受け入れられないものになつてしまいました。ただしハイデッガーは次のように述べる。すなわち、「もつとも、キリスト教や形而上学までもがそうなのであるではありません。むしろそれらは新しい意味でのものですが」。そして、実際にこの頃から、ハイデッガーは、パウロやアウグスティヌスといった古典的神学者、あるいはルターやシュライアマハー、キルケゴールやルドルフ・オットーなどの「プロテスタント系神学」に積極的に取り組み、当時支配的であつた新スコラ主義に対する「解体 Destruktion」作業を開始することになるのである。

しかし、いづれにせよ、前述の通り、「本来性／非本来性」および「根源的／通俗的」という図式、またそれと輻輳する「朴訥な田舎の生活／軽薄な都市文明」という保守的な構図は、——キリスト教そのものからの離別の後も——終生ハイデッガーの思索を規定し続けるものとなつた。したがつて、ハイデッガー

の思想がいわゆる「保守革命 Konservative Revolution」に数え入れられるとしたら、その思想的起源は十九世紀末から二十世紀初頭のドイツ語圏の保守的なカトリック信仰に求められるべきであろう。つまり、「ハイデッガーを保守革命論者に近付けているのは、全体が一であり、一が全体であることを目指す全体主義的な社会像を支持している姿勢である」としたら、また、保守革命論者の危機感が「物質文明の浸透によって古来のドイツ精神が失われることであり、デモクラシーという名の個人主義・共和主義の普及による共同体の崩壊である」としたら、ハイデッガーの場合、アブラハム・ア・サンクタ・クララ論や「アカデミカー」への寄稿論文の中ですでに見てきたように、個性崇拜を忌避し、伝統や権威といった超個人主義的なカトリック信仰に共同体の立脚点を置く最初期の思索に、その源泉が見出されるべきなのである。

また最後に指摘しておきたいのは、ハイデッガーにおいて、保守的立場からの現代批判の基盤はやがてカトリック信仰から古代ギリシアへと移行して行くが、その際に、単に前者が捨て去られ後者へと容易に移行していったわけではない、ということである。初期のハイデッガーが基盤としていた保守的なカトリック信仰は、その現代批判の内容を継承しつつも、その都度、批判的で真摯な「対決 Auseinandersetzung」をすべき相手となっていくたのである。中期や後期のハイデッガーの言説に散見される、カトリック教会ないしキリスト教にたいする愛憎

入り混じった批判は、このような「対決」から生じてきている。冒頭に引用したハイデッガーの言葉、すなわち、自身の神学的由来が、「将来でもめりつひる」(GA12, 91)とどう言葉は、こうした意味で受け取られなければならないのである。

註

- (1) Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Bd. 12, *Unterwegs zur Sprache*, Frankfurt am Main, 1985, S. 91 の略。本稿では煩雑な註を避けるため、同全集からの引用を GA と略記し、その巻数と頁数を挙げる。
- (2) Victor Farías, *Heidegger und der Nationalsozialismus*, aus dem Spanischen und Französischen übersetzt von Klaus Laermann, mit einem Vorwort von Jürgen Habermas, Frankfurt am Main, 1989, S. 49.
- (3) ebd.
- (4) 成瀬治、山田欣吾、木村靖二編『世界歴史体系ドイツ史 2』山川出版社、一九九六年、四二二頁以下参照。
- (5) Rüdiger Safranski, *Ein Meister aus Deutschland: Heidegger und seine Zeit*, Limitierte Sonderausgabe, Frankfurt am Main, 1998, S. 20.
- (6) 高田珠樹『ハイデガー——存在の歴史』講談社、一九九六年、二七頁。
- (7) Rüdiger Safranski, *Ein Meister aus Deutschland*.

- Heidegger und seine Zeit*, S. 24.
- (8) a. a. O. 27.
- (9) Victor Farias, *Heidegger und der Nationalsozialismus*, S. 53f.
- (10) Rüdiger Safranski, *Ein Meister aus Deutschland: Heidegger und seine Zeit*, S. 27.
- (11) Hugo Otto, *Martin Heidegger: Unternwegs zu seiner Biographie*, Durchgesehene und mit einem Nachwort versehene Neuausgabe, Frankfurt/New York, 1992, S. 59.
- (12) Victor Farias, *Heidegger und der Nationalsozialismus*, S. 65.
- (13) a. a. O. 76f.
- (14) a. a. O. 77.
- (15) ebd.
- (16) a. a. O. 78.
- (17) Hugo Otto, *Martin Heidegger: Unternwegs zu seiner Biographie*, S. 62.
- (18) Victor Farias, *Heidegger und der Nationalsozialismus*, S. 74..
- (19) Hugo Otto, *Martin Heidegger: Unternwegs zu seiner Biographie*, S. 63.
- (20) ebd.
- (21) ただし、オットやフアリアスの指摘もあつてか、二〇〇〇年に出版された『ハイデッガー全集16巻』には、これらすべての文書が収録されることとなった。
- (22) *The programme of modernism: a reply to the encyclical of Pius X., Pascendi Dominici Gregis translated from the Italian, with an introduction by A. Leslie Lilley*, London, 1908, 184.
- (23) Hugo Otto, *Martin Heidegger: Unternwegs zu seiner Biographie*, S. 63.
- (24) a. a. O. 106.
- (25) ebd.
- (26) ハイデッガーを保守革命論者と看做す見解については以下の文献を参照のこと。青地伯水編、友田和秀、國重裕、恒木健太郎共著『ドイツ保守革命： Hofmannスタール／トーマス・マン／ハイデッガー／ゾンバルトの場合』松籙社、二〇一〇年、特に一四九―一七八頁。
- (27) 青地伯水編、上掲書、一三頁。
- (28) 青地伯水編、上掲書、一五六頁。